

西南学院大学

図書館報

第 19 号

昭和 37 年 4 月 10 日 発行

発行所 福岡市西新町 798 電 0031

西南学院大学 図書館

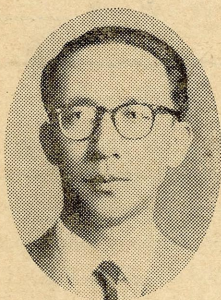
発行人 山下 和 夫

真理はあなたがたに

自由を得させるであろう

(ヨハネによる福音書第 8 章第 32 節)

館長 木 村 毅



長くかつ重苦しい受験勉強を経て、初めて大学というものの門をくぐられた新入生諸君、今諸君は息苦しい暗やみから光明の世界に抜け出たときのような、何かホッとした解放感を味わうと同時に、これから始まる 4 年間の大学生活に対する大きな期待に胸ふくらませていることであらう。

しかし、そういう諸君のなかにも、静かに自己を反省するとき、その期待が何か空虚としたものであり、一体大学で何をすることができるのか、いやそれどころか、何かから始め、どういう方向に歩いて行けばよいのか、皆目見当さえつかない者もあるのではないだろうか。確かに両足でこの大地の上に立っているのに、何かこうフワフワと宙に浮いたような感じのするものもいるのではないだろうか。住み慣れた高校を離れて大学という新しい環境にはいった瞬間、そういう感じをもつものがあつたとしても、決して不思議ではない。ことさら大学というものにもったいを付けるわけではないが、既成の知識を伝授するだけの高校と、歴史や伝統に光り輝やく「定説」をささげ、どこまでも批判し吟味して、まことの真理を探し求めることを主たる任務とする人学とでは、われわれの側にも学生の側にも、その勉学のしかた、ものの考え方から生活態度に至るまで、根本的断層がなくてはならぬはずである。「駅弁」なみといわれる地方の新制大学でも、この点においては、いわゆる有名大学にいきさかでも劣るものではないはずである。学生諸君もそのつもりで努力して貰いたいものである。

ところで、何もかも哲学という名のもとに包摂したギリシア時代の学問とは異なり、近代のそれはその内部で細かく分れ徹底的に専門化した。そうして、どの一つの小さな部門をとって見ても、そこには汗牛充棟もたゞならぬおびただしい文献が堆積している。マックス・ウェーバーもいうように、ひとはみずからを極端に制限し、専門化するこ

となくしては、到底何かをなし遂げることはできなくなった。それはまさに近代人の、特にその知識人の宿命である。大学はその頂点に立っているといつてよい。しかし、だからといって、そこに学ぶ諸君が入学早々からひとかどの学者振って、自己を狭く限定しようとするなら、それはこっけいなばかりでなく、はなはだ危険でさえある。むしろ、大学の普通コースでは、深く掘り下げることを犠牲にしても、幅広く学ぶ必要があると思う。その一つ一つが何に役立つかは、あとになって段々わかって来るであらうし、今日はインテグレーションの要求される時代であるから、なおさらそうである。だから、与えられたものは何でも受容する開かれた心構えが必要である。

ここでは、何でも見てやろう、何でも聞いてやろう、何でも学んでやろう、というていのガメツサがほしい。正課の学科だけでなく、文芸、音楽、美術、映画、テレビ、あらゆるものに接することを勧めたい。といつても、もちろん、ただ間口を広げさえすれば、それでよいというのではない。社会通念や学問の常識を超えて、その真実の根底へ探り入る魂の真実な要求がなくてはならない。それなくしては到底真理に至ることはできない。なぜなら、ひとは通常内からのものであろうと、外からのものであろうと、無限に多くの偏見にとらわれていることをまぬかれない。未開人がいかに多くの迷信や呪術のとりこになっていることか。諸君を未開人にたとえるつもりはないが、やはり知らず識らずさまさまの殻をかぶってはいはしないだろうか。宗教について、学問について、社会生活について。自己の陥っているとらわれに気付かないことが、とらわれの本質に属しているのである。真理に至るには脱皮が必要である。脱皮し、身辺にブラ下がる余計な飾りを振り捨てて身軽になったとき、はじめてバレリーナのように自由にふるまうことができるであらう。

いやむしろ、われわれが自分から真理に至るのではなく、真理そのものがわれわれを無限に脱皮させ、真の自由の世界に招き寄せる当のものであつたことに、そのとき初めて気が付くであらう。(1962. 4. 1.)

(商学部教授)

経済学

中 沢 慶 之 助

の「教養の貧困」はない。そしてそのことが世の人間関係のもつれさせ、労働争議、政争、戦争へと追い込んでいく。

今日の高校で勉強する「社会」の花形は「日本史」である。商学科や経済学科や実務コースに入学する者でも、この狭い意味での「社会」を十分やった人は少ないようである。勿論この「社会」は「経済学」より幅が広い。それでもこの「社会」をみっちりやった人は「経済学」に対して非常に近親感を覚え勉強し易いのである。

本年の「経済学」のテキストとして、拙著「経済学論攻」を使用することにした。

本学で十数年間「経済学」の講義をし



経営学を初めて学ぼうとする新入生諸君に、よき入門の手引となるべき「本」としては、まず最初に同じ題名の次の二書をあげたい。

古川栄一編『経営学の学び方』(ダイヤモンド社)、山城 章著『経営学の学び方』(白桃書房)

この二書は、それぞれ特色を持った本であるが、ともに経営学を学ばんとする初学者に対する入門書としてのみならず、進んで経営学の研究を深めようとする場合の研究手引となりうるように意図されて書かれたものである。つまり入門書であるとともに、研究書であり、研究の手引書である。どちらも経営学関係の文献を多くあげて、それに簡単な内容紹介をつけ加えているので、これから経営学を勉強しようとする新入生諸君には、大いに役立つことであろう。

これから入門書に触れた後、さらに経営学の中心問題を体系的に

経営学

今日の経営学につ

市 村 昭 三

場合は、古川栄一著『新版、経営学通論』を読んだがよからう。これも経営学の初学者にたいする指導書として書かれたもので、よくまとまった本である。

また、経営学は主としてドイツとアメリカで発展してきたものであるから、今日の経営学をよりよく理解するために、『ドイツ経営学』(市原季一著)と『アメリカ経営学』(古川栄一著)を読んでおくとよい。これらは初学者にも読みやすい本である。

もう一步ついでに学問的に研究しようとする場合は、『経営学の基礎』(藻利重隆著)、『経営学本質論』(山本安次郎著)、『近代経営学』(占部都美著)、及び『個別資本と経営技術』(馬場克三著)などが諸君の学問的欲求を充たしてくれらる。 (商学部講師)

社会科学の中心軸をなす「経済学」について十分の理解がないことほど、人間の

ている間に、折に触れ、問題意識を中心に、ものした論文を綴ったもので、体裁からも内容からも、バランスのとれたテキストではないが、「原論」や「政策」、その他の専門学科の基礎となる原理を学生諸君に叩き込むためには役に立つと信じている。

少し語句や文章がむづかしいかもしれないが、この原理的方法論をしっかりと頭を練っておいたら、上級に行きつて必ず自信がつくにちがいない。勿論、参考書として手頃な「経済史」や「経済学史」を読み、学会会の「理研」「学史」「国際経済」等の研究会に入って先輩に鍛えてもらうことも必要である。

イデオロギーについても、常に学問的に理解していくため、しっかりと「経済学」を身につけていなければ、独断に陥って、有益な奉仕も出来なくなるのである。

因に、本年度は、文学部の「経済学」は川島信義先生が担当される筈である。 (商学部教授)



会計学


荒 川 邦 寿

簿記・会計にかぎらず、社会科学の研究は歴史的、論理的、機能的側面から展開されねばならない。そこで、まず簿記史・会計史の書物としてリトルトン会計発達史・ウルフ古代会計史などの古典や、黒沢清、江村稔、小島男佐夫、田中藤一郎、白井佐敏等の簿記発達史を是非ひもどかされたい。

次に簿記の論理は、畠中福一、高橋吉之助の勘定学説研究や、沼田嘉穂の簿記論攻などで、企業会計の論理はい

ろいろな人による財務諸表論や、太田哲三、木村和三郎の会計学研究、馬場克三の減価償却論などで研究されたい。

また、リトルトンの会計理論の構造に見出されるアメリカ制度学派の形成については、山根忠怒のアメリカ財務会計、高上一男の企業会計制度の構造などを見る必要があり、シュマーレンバッハの動的貸借対照表論にはじまるドイツ動態論の内容については、岡本愛次のドイツ会計学史や谷端長の動的会計論の構造などを手にする必要がある。最後に、現実に機能している会計の果す役割については、いわゆる会計原則論として、リトルトン会社会計基準序説や中島省吾の会計基準の理論、浅羽二郎の会計原則の基礎構造を手にすると同時に、松尾憲橋の近代会計の基調や根節重男の保守主義会計の形成など批判的会計学の基礎をも探る必要があるだろう。また、会計と商法・税法など法的規制との関連を大住達雄、西山忠範、忠佐市等の著書から探るもよい。これら簿記・会計の全貌を概括的に把握する入門書としては、青木書店の新しい会計シリーズ全五冊が最も適当であろう。 (商学部助教授)



私の推薦図書

新入生への読書案内

法律学

船越 栄一

商学部・経済学部では学部の性質上、民商法が中心となって講ぜられるのは当然であるが、法律の分野には民商法を中心とする私法部門のほか憲法、刑法、行政法などで構成される公法部門がある。憲法は一国の基本法として教養の点からも十分マスターしてほしいものである。公法、私法の両部門にまたがる労働法

を中心とする社会法も資本主義の発展が生みだした矛盾の産物として忘れられてはならない法の一つである。

法律学はシルレルのいわゆる「パンのための科学」の時代から大きな発展を上げてきている。法律の概念の分析や法規の文理解釈からは法現象の真の把握はできない。法の哲学的考察、法の社会学的理解の必要は法哲学と法社会学とを生みだしたが、法哲学、法社会学はその基礎に哲学、倫理学、政治学、経済学、社会学、歴史学などの広範な知識を必要とする。法律学の勉強はその周辺の科学への深い理解なしには不可能であって、一般教育の知識と教養を十分に身につけられることを先ずのぞみたい。法律学の範囲に限り（テキスト・ブックをのぞく）是非読んでほしいと思うものをあげれば次の通りである。（商学部部長）

宮沢 俊義	憲法入門
我妻 栄	民法案内
末弘 厳太郎	民法雑記帳
我妻 栄	判例漫策
川島 武宜	所有権法の理論
我妻 栄	近代法における債権の優越的地位
岡松 参太郎	無過失損害賠償責任論
松本 蒸治	商法解釈の諸問題
磯田 進	労働法

英文学

八木 幹

欲を申せば限りがありませんし、外国文学を志望する以上、肝心の語学力が覚束かないのに無闇に焦っても成果は期待できません。読まない古典のリストに目を眩まされる事はこの際慎みましょう。

最近洋書も値があがる一方で、懐を大いに脅かしますが、此処に選んだ書物は殆んどが廉価版で入手が容易ですから、この機会に是非各自購入されることをお勧めします。（朝夕机の前に並べておけば、否応なしに目につくものですし、折角お金を払ったものを読まないのは損だとくるのが人情です）

I 小説

◎Maugham : Cakes and Ale (Penguin)

◎ " : The Moon and Sixpence (")

◎Isherwood : Goodbye to Berlin (")

◎Lawrence : Sons and Lovers (")

◎Forster : Passage to India (")

◎Joyce : A Portrait of the Artist as a Young Man (")

◎Galsworthy : The Man of Property ※

◎Brontë, E : Wuthering Heights (")

※最近のPenguinのカタログには見えませんが、現在品切れかも知れません。研究社出版の繚乱版もあります。The Forsyte Saga (I) 中島文雄註、但し原則として、このリストには所謂註釈ものは省いています。最初はあまり註にとらわれずに、出来るだけ辞書を頼りに、ともかく一冊の本を読破するという習慣をつけるのが望ましいと信じます。

◎Thackeray : Vanity Fair (Everyman)

◎Dickens : David Copperfield (")

◎Woolf : To the Light House (")

II 詩集

第1に英語の基礎を1年2年の間にしかとつけておくこと。よむこと。話すこと、かくことの基礎である。そしてその基礎の基礎として英文の基本形の例題を暗誦するのもよい。

あるいは教科書や自分が読んだ文章で、美しいなあ、これはいいなあとか感じたものをノートしてその句なり節を覚えこむこと。そしてそれを

英語実務

河野 博 範

必ず口に出して書いてみたり※日記か手紙かとか文章にかいてみたり※習熟することである。それから単語帖も自分なりのをつくるがよい。西南には他の大学に見られないほど外人の先生がおられるのでつらあつかましく（但し無作法にならないように……しかしこれも失敗して赤恥をかくのが一番早道である）教えをうけることだ。先生や奥様のバイブルクラスや会話のクラスにつとめて出席の折をもつことである。

よく聞くことだ。さっぱりわからんからいかぬと。こんなばかかなことはない。はじめからわかってたまるものか。わからんから行って習うのである。教わるのである。そうだ。これもつらのかをあかくして公然と大声で必ず一口か二口かは声に出して帰ること。ただだまっていたのでは絶対だめ。赤はじを大衆の面前でかく練習をするとつらの皮があつくなるものだ。こういった基礎の訓練を充分してほしい。よんでもらいたい本の紹介が英語学習法になってしまった。実務コースの諸君が読まべき書物は岩根学生部長が指示されているのを左に拝借することにする。

程度の高すぎるのもあるので、新入生諸君に適当と思われるのを拾うと、齊藤著「実用英文典」（開隆堂）、長井著「New Handbook of English」（研究社）、渡辺著「英語の語法」（創芸社）専門書としては、McConnel : "Economists past and present," P. A. Samuelson : "Economics- An Introductory Analysis" 訳書のあるのは、Marshall : "Elements of Economics of Industry" (戸田訳)。研究社小英文叢書（英国経済学選集）"Selection from English Economists" は新入生の必読の書というべきでしょう。尚次の雑誌は是非購読をすすめたい。"Current of the World." 時事英語研究 "Business English" 余力のある人は "Time" と "News Week" など。（文学部部長）

◎Keats : Poems (World's Classics)

◎Wordsworth : Poems (")

◎A. E. Housman : Poems (Penguin)

(次頁中段につづく)

告知板

- 4月1日から学生利用規則の一部が改正され、開館および閉館時間が次のように変更になりましたからご承知下さい
- ①通常は午前8時30分から午後7時まで
 - ②定期試験中およびその直前相当期間は午後9時まで
 - ③休学期間中は午後5時まで
 - ④毎月第一水曜日は書庫整理のため午後1時まで
- 賀賀院長が寄贈された図書、910冊の整理が漸くこの程完了し、賀賀文庫として商学閲覧室の奥に配列されました。
- 分類目録を図書の所在場所ごとに区分し、クローズドとオープンとの識別を容易にしました。
- 4年次生は卒論作成のために特別貸出を受けることができます。冊数は3冊まで1カ月間です。手続きは係員にお尋ね下さい。

(前頁下段より)

Palgrave の The Golden Treasury.

は是非とも手許に置きたいものです。(World's Classics)

Ⅲ 劇曲

G. B. Harrison の The Penguin Shakespeare は小冊子ですが、なかなかよいものです。やたらに詳細な註釈の多い Shakespeare 本に迷わされずに、最初は、Onions の A Shakespeare Glossary (紀伊国屋) を利用して直接 Shakespeare に親しむのが賢明です。周辺に留って、二次的な知識に、真の読書体験を失うようなことがあってはなりません。

◎Julius Caesar (Penguin)

◎Romeo and Juliet (〃)

今すぐに読まなくとも、同じ叢書の四大悲劇、

◎Hamlet (Penguin)

◎King Lear (〃)

◎Othello (〃)

◎Macbeth (〃)

は揃えておけば、少くとも刺激になる筈です。

私が西南学院図書館長を勤めたのは、昭和14年4月から、同23年8月まで、都合9年5ヶ月間である。昭和14年といえば、東亜を蔽う戦雲

がようやく色濃くなったところで、西南でも、外国伝道局の援助は全く絶え、宣教師もアメリカに引き揚げて、非常時に対処する体制をとらなければならなくなった時代であった。そういう時代に、かつては神学科教授であり、後に学生監、図書館長を兼ねておられた小野兵衛教授辞任のあとをうけて、図書館長を兼ねることになったのであった。

当時の図書係は尾崎克氏であった。氏は現神学科教授尾崎圭一氏の令弟で、在職中に応召、即日歸郷、その結果急逝された方であるが、図書館の事務一切を切り廻わしておられた。しかも会計は本部で取り扱っていたので、館長としての私の仕事は至極閑散であった。しかし、記憶に残るような事件もないではない。私が第一に直面した事件は、左翼図書の没収であった。当時、図書に対する検閲、統制は日に日に強化されつつあったが、ある日警察から人か来て、図書館内にある左翼図書を没収すると言いつ出した。その頃の図書館は、今は取りこわされた中学部西校舎(今の高校理科教室のあたり)の西端の一教室に借りりをしてあったが、警察ではその教室の前の廊下の閲覧机の上に、館内にある左翼がった書物、マルクスとか、資本論とか、共産とか、社会主義などの名前のついた書籍を全部持ち出して並べた。数百冊もあったと思う。学校からいろいろ抗議したが、結局持って行ってしまった。しかし面白いことに原書はこの災厄を免れた。たとえば、「資本論」の英訳書のようなものがそれで、今も健在のはずである。外国語のタイトルが読めなかったためであろう。

第二は20周年記念事業の一つとしての図書館の新築である。それまでは図書館とは言っても、現実には図書室で、教室に借りりしていたのが、赤煉瓦の書庫と木造の閲覧室が完成した。赤煉瓦の書庫ははじめ二階建であったが、後一階を継ぎまして三階建になった。そして、現在の大学図書館のできるまで使用されたが、今はピンポンの練習場として用いられているようだ。この書庫の北側の窓からはグラウンドがよく見えて、〃書庫守や声なきラグビー- 玻璃戸走す、〃という草田男の句を思わせた。

第三には、臨戦体制が強化されるにつれて、基督教主義学校である西南にも見えない圧迫の手が加わった。その年国体明徴というのはやはり言葉の一つであったが西南にも「国体研修文庫」というものが設置された。今も残っている。大学と中学の間にあるある宣教師館の一室に、そういう関係の図書を集めたことを覚えている。

第四は戦後のことになるが、故波多野培根先生の蔵書を波多野家から譲り受けたことである。先生の蔵書は宗教、哲学、歴史等にわたってなかなか立派なものであった。近頃、私の宅に畳替えに来た畳屋の主人が、西南には、昔、非常に沢山の本を持っておられた先生が居られたことを話をしていた。波多野先生のことである。戦後、書籍が非常に払底していた時に、立派な蔵書ある時代の西南の精神的指導者であった先生の蔵書をもって、西南の図書館の書庫を飾り得たことは一つの大きな喜びであった。

私の館長時代は、これを通観すると、戦争準備時代から、戦争中、戦後と疾風怒濤のような時代で、図書館に比較的用の少い時代であった。さきに引用した草田男の俳句は図書館長を書庫守と言いかえている。もちろん、図書館長では五・七・五にはまりにくいからであろうが、私の図書館長の時代というのは書庫守の時代であった。図書をじっと守っていた時代であったように思う。

私が館長をやめたのは昭和23年であるから、学校全体が大学設置のために非常な努力を続けていた時であった。大学設置のためには図書館の充実ということが必須の条件であった。そして、これは私の後任の八田教授によって推進されたのであった。(文学部教授-学術研究所長)

〔学院図書館回顧録 その2〕

機会があれば出来るだけ、図書館をのぞくことを勧めます。現実の作品が、文学史や他人のリストには見られぬ迫力をもって私達に呼びかけてくる事でしょう。(文学部講師)

戦中戦後の学院図書館

昭和14年 — 23年

坂本重武

【編集後記】

この19号は新入生諸君への読書案内を特集とした。それと共に坂本重武先生より学院図書館の戦中戦後に関する興味深い想い出の原稿を頂くことができた。原稿寄稿者に深謝。(I)